

【フランス研究集会 井上円了とその時代】

思想史の方法論
— 思想の受容史から受容の思想史へ —

黒田昭信

Abstract:

Even though it is indisputable that the history of ideas in the Meiji period is characterized as being the history of the reception of various concepts that had developed within the history of western thought, it was also a process in which the act of reception itself was intentionally refined as a methodological attitude. That process could equally be read as a history of the attempt to grasp ideas in their new possibilities, far from the context in which they arose, yet always as "Other."

明治思想史が西洋思想史の中で培われてきた諸概念の受容史としての性格を持つことは論を俟たないとしても、その歴史は、受容することそのことが方法的態度として自覚的に精錬されていく過程でもあったのであり、その過程はまた、ある思想を、それが生まれた文脈から離れたところで、しかしあくまで〈他なるもの〉として、その新しい可能性において捉えようとする試行の歴史としても読まれうるだろう。

哲学の方法としての思想史

一人の思想家あるいはその思想を理解するとはどのようなことなのか。そのためには、まず、次のような三つの態度は避けなくてはならないだろう。その思想を歴史的條件に還元する歴史主義。その思想を現在の観点のみから評定する現在主義。その思想を歴史的脈から切り離し、それを構成する概念・命題だけを分析する普遍主義。ある思想が生まれてくる歴史的脈を辿り、思想そのものの生成・変容過程を追いかけて、その中に歴史的脈を超えるものを捉えること、これが一人の思想家あるいはその思想を理解するために必須の手続きであると思われる。

思想史へのアプローチとして、どのような方法がありうるだろうか。一つの試みとして、次のような態度が考えられるだろう。歴史を複数の層から成る全体と見なし、「出来事の歴史」から「深層の歴史」へと順序を追って各層を読み分け、いわば思想の生成層まで、事実と理由それぞれの順序に従って、下降していく地層学的アプローチ。

本発表の三つの目的

外来思想の受容のされ方を問題にする思想の受容史ではなく、その受容の仕方そのものの中に一つの思想的態度が精練されてくる過程を追う、いわば受容の思想史という発想を提示すること。

その受容の思想史の適用として、概念史を素描すること。その一例として、明治以降の日本における「*Subjekt / subject / sujet*」概念の受容と変容過程の中に現れてくる固有性を示すこと。

それらの手続きを通して、開かれた議論の場として、可能性において捉える思想史の方法を示すこと。

「*Subjekt / subject / sujet*」概念の受容と変容

明治時代に西洋から同概念がその他の諸概念とともに導入・翻訳される過程で発

生じた、その意味の転倒と起源の隠蔽・忘却、訳語としての「主観」の定着、昭和初期における「主観」から「主体」への跳躍、戦前戦中の京都学派に見られる「主体」概念の跳梁跋扈、戦後の主体性論争等、この概念が辿った日本近代思想史における変遷については、それを一次資料に基づいて見事に描き出した小林敏明『〈主体〉のゆくえ』（講談社選書メチエ、2010年）に譲り、ここでは、そこには登場しないもう一つの「主体」の歴史について、その一場面を示そう。

「主体」概念を導入したという点で日本近代哲学史に重要な役割を果たした三木清に影響されるかたちで、西田幾多郎が堰を切ったかのように同概念を頻用しはじめた論文「実践と対象認識」が発表された1937年に、京都学派における「主体」の流行とはまったく独立に、言語学者時枝誠記が、その後1941年に出版される『国語学原論』の総論の中心を成す部分を論文「心的過程としての言語本質観」として発表する。ソシユール言語理論批判を通じて時枝独自の言語理論が展開される同論文そして『原論』総論には、「主体」という言葉がほとんど毎頁と言ってもいいほど頻用される。他方、『原論』各論では、西洋語文法に依拠した「主語」概念の日本語文法における不適合性が豊富な用例に基づいて論証されている。つまり、文法的概念としての「主語」からの解放、その「主語」と呼び慣わされてきたが実のところは補語的な要素の述語への内包・従属と、時枝の言語過程説における「主体」概念のその根本要素としての遍在とは、理論的に不可分なのである。ここに「sujet」概念が日本近代思想史におけるその受容過程を通じて辿り着いた、その精錬過程の一つの到達点を見ることができるとはならないだろうか。

思想の受容史から〈受容〉の思想史へ

〈受容〉をその一つの構造契機とした日本思想史は、どのような形をとることができるだろうか。それは内発的発展史にも外来的影響史にも還元されえない。前者は、日本思想史を貫く座標軸あるいは構造化契機の欠如のゆえに困難であり、後者は、〈外来〉対〈伝統（あるは土着）〉という対立図式の虚構性ゆえに、そもそも妥当性を欠いていると言わなくてはならない。

日本思想史の外なる源泉、それをそれとして他在において理解しつつ、絶えずそこへと回帰し、その都度受容の仕方を検討し直し、その作業を通じて、思想史に携

わるもの自らが、その思想的系譜へ、自らをいわば主体的に記入する思想史、一言で言うならば、受容的思想形成史の構想が上記の問いに対する一つの答えとならないであろうか。

〈他なるもの〉に開かれた思想の形成

外なる源泉のそれとしての受容は、私たちに〈自己の外〉に出ることを要求する。〈他なるもの〉であるその源泉への回帰は、自己閉塞的「伝統」に自己同定することを許さない。ある思想的系譜への自覚的記入とは、〈他なるもの〉の排除ではありえず、また逆にその消化・吸収に終わるものでもありえず、その〈他なるもの〉から〈現在〉を隔てる距離を測定しつつ、開かれた生きた伝統の形成過程の中に自らを主体的に〈書き込む〉ことにほかならないだろう。

(黒田昭信・セルジー・ポントワーズ大学言語国際研究学部准教授)